２０２２年（令和４年）　７月１９日　火曜日

デーリー東北　１２面　掲載

第104回全国高校野球選手権青森大会

光星織笠 逆転満塁弾

燃える中軸、チーム救う

【東奥－八学光星】3回八学光星2点適時二塁打を放った織笠健斗が一塁を回り、拳を突き上げる＝けうが豚

「背負うのは慣れている」。3回の光星八戸の攻撃。1点を追う2死満塁で打席に立ったのは、織笠健斗（3）。百中出の「外野フライかなと思った」という打球は大きな放物線を描いて、左中間の壁を越えた。形勢を一気にひっくり返すグランドスラム。一塁を回ると、勝ち誇ったように右拳を突き上げた。

今大会初めて、3回戦と打線が本来の力を出し切れていなかった。そんな中で頼々史勝は初回に2点を失い、いきなり苦境に立たされた。

二回は一番打者と相手の3連続四死球で1点を返し、なおも好機で迎えた打席だった。高校最後の夏、"夢の実現へ負けられない戦いで、中軸として燃えないわけにはいかなかった。打った初球は、相手主戦がカウントを取りに来た内角高めの甘いコースだった。「見逃すことなく、鋭く振り抜き、相手に悔いていた試合の流れを引き寄せた。

ヒーロー

織笠は5回の守備でも中堅飛を捕り、この日は計3打点をマーク。「ボール球を追わないというテーマで練習してきた成果が出た」とうなずいた。

自らのバットでチームを引っ張った勝利の立役者は大車輪の活躍にも浮かれることはない。「もっと打って打ちまくる。甲子園出場を大目標に、一戦必勝でいく」と表情を引き締めた。（福田篤）

洗平兄弟リレー

【東奥－八学光星】2番手として3回1安打無失点だった八学光星の洗平歩人

○…八学光星は1年生投手・洗平歩人（メンバー入りしている兄航平比呂が先発マウンドに上がった。初回に5連打を浴びて先制を許すなど3回2失点のほろ苦い夏のデビューとなったが、2番手で継投した兄の主戦歩人が3回1/3で無失点、"兄弟リレー"で勝利を手繰り寄せた。

洗平比は「1年生だが力のある投手」（仲井宗基監督）とベンチの期待を背負って大一番に臨んだ。初回は「緊張もあった」ため連打で2失点したが、二、三回はテンポの良い投球で立ち直り、その後の反撃を呼び込んだ。「個人的には悔いが残る内容だが、兄が後に投げてくれて心強かった」と感謝した。

洗平歩は、三回の攻撃で弟の代打で打席に送られ、左越え二塁打でチーム初安打を記録し、ビッグイニングの口火を切った。投げては4回途中まで無失点。「まさにエースのピッチングだった」と東義・工藤秀樹監督も絶賛したが、制球が乱れて3番手にマウンドを譲ったことには「もうひし投球をさせないと」と自らに言い聞かせるように悔った。

工大一が不戦勝

2022 夏

大会第9日

第104回全国高校野球選手権青森大会第9日は18日、弘前市はるか夢球場で準々決勝1試合が行われ、3年ぶりの全国出場を目指す八学光星は、初回に先制を許しながらも三回に満塁本塁打などで5点を奪い、逆転勝ち。第2試合に予定されていた工大一－工大一は、工大一が「学校事情」で初戦を辞退し、工大一の不戦勝となった。19日は休養日で試合がない。20日は県営球場で準決勝の青森山田－工大一（11・00）、八学光星－弘学館（13・30）が行われ、決勝進出チームが決まる。（加賀谷）

準々決勝

東奥義塾	2	0	0	0	0	0	0	2	0	4
八学光星	0	0	5	0	1	0	0	1	×	7

（東）魚田、木村一優藤
（八）洗平比、洗平歩、富井、鹿部一文元

▷本塁打　田田（東）織笠（八）
▷二塁打　今泉（東）洗平歩、野呂（八）
▷暴投　洗平比（八）
▷試合時間　2時間47分
（球審＝柳田、塁審＝相田、小西、吉川）

【評】八学光星は1点を追う三回2死満塁、織笠が左中間に逆転本塁打。五回は織笠の中犠飛、八回には青木の適時打でそれぞれ加点した。投げては、4人の継投で4失点にとどめた。東義は八回、田田の左越え2点本塁打で追い上げたが、後が続かなかった。

八学光星・仲井宗基監督（3回裏無得点の内容に）「全体的に硬さは、攻撃では自分たちの力を出し切れていない部分がある」

東義・田田祥貴（八回に追い上げの2点本塁打）「戦めの変化球にチを出さないよう、甘く入ったところを一発で仕留める意識だった」

デーリー東北新聞社提供